

〔短報〕

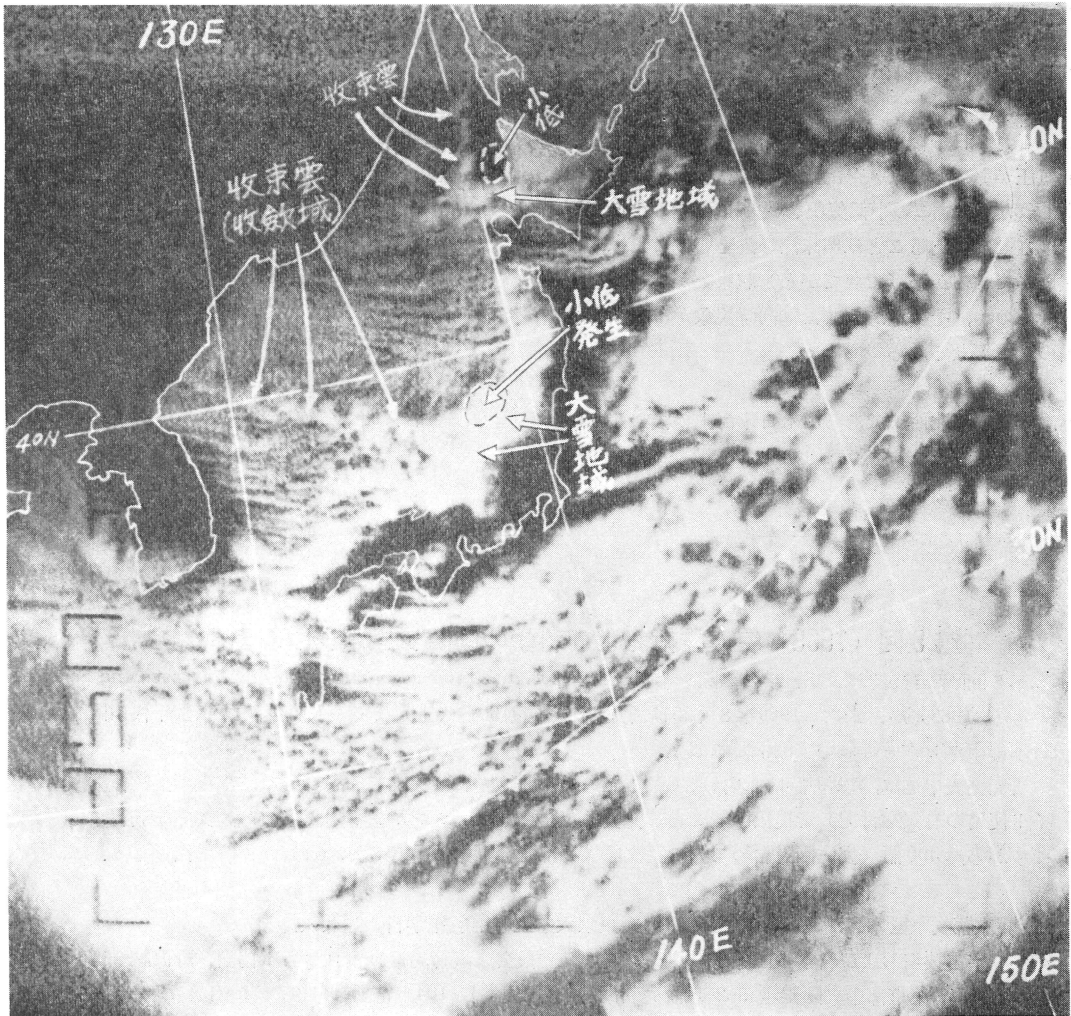
昭和44年1月上旬の日本海側大雪のときの気象衛星写真*

岡林俊雄**

昭和44年1月上旬は日本列島の日本海側は大雪であった。その雪は前年12月29日ころから降りはじめたが、とくに1月1日から2日にかけてが最盛期（1日9時～2日9時に新潟県高田の新積雪126cmが最高）で4日ま

で大雪であった。

その大雪期間の気象衛星のAPT受画を注目していたが、日本海上の雲分布の経過は興味深いものがあった。その中の1枚昭和44年1月2日9時9分（JST）のESSA



昭和44年1月2日 北陸大雪のときの気象衛星写真 ESSA 8号1月2日9時8分38秒（JST）
Sub Point 33.4° N 138.8° E

* Photograph of heavy snowfall on Japan Seaside on Jan. 2, 1969, taken by ESSA

** T. Okabayashi. 気象庁予報課

8号の写真のをせた。写真をみて特に興味深い点は

1. 北西季節風による雲は、日本海に入ってからではじめる。しかも日本海に入ってからすぐできている。

(これは大雪のときの特徴である)。

2. 北海道西岸には小低気圧が存在し、それに付随する収束雲が間宮海峡から南下し、しだいに北海道のほうに湾曲し、ちょうどそれがぶつかった地域が大雪となっている。

3. 日本海中央部にも一本の長大な収束雲が発生している。それは長さが1000kmもあり、北朝鮮沿岸近くから発生し、能登半島、新潟付近に達しており、ちょうどそれがぶつかった地域が特に大雪となっている。

3. 1月2日午後になって、この収束雲のすぐ北側に小低気圧が発生した(メソ的なもので移動してきたものかもしれない)。この小低気圧を北海道西岸の小低気圧と対応させて考えることは興味深い。ということは、小低気圧ができるから(できてから)収束雲ができて雪を降らせるのか、その逆か、または同時現象かはしばしば議論の対象になるからである。

5. 一般場は北西風であっても日本海上の雲の流れは

単純でない。いくつかの雲の筋の流れの不連続線または収束線が現れるが、特に長大なのが1本か2本あらわれることがある。そしてそのようなときにしばしば大雪が降りやすい。これもその一つの例である。このときの850 mb面の流線を描いてみるとその収束線はほぼこの収束雲の位置・走行と一致している。

6. この収束雲をもたらす収束線を便宜のために仮に“日本海収束線”と名付けると、これは従来北陸の大雪のときいわれていた北陸不連続線の全容であって、北陸不連続線は観測データなどの関係で、この“日本海収束線”の海岸近くのごく一部分を対象にしていたのではあるまいか。

なお、この短報については当日大雪情況監視のため出勤しておられた予報課長久米庸孝氏から有益な示唆を頂いた。

参 考 文 献

- 1) 岡林俊雄. 1967. 技術時報, 札幌管区気象台. No. 52
- 2) 岡林俊雄. 1967. 技術時報, 札幌管区気象台. No. 53
- 3) 岡林俊雄. 北部管区気象研究会誌, 札幌管区気象台. 昭42年度版

第9回(1969)宇宙技術および科学の国際シンポジウムのお知らせ

第8回「宇宙技術および科学の国際シンポジウム」(Eighth International Symposium on Space and Science Tokyo, 1969)が、来たる1969年8月25日(月)から同月30日(土)までの6日間、東京都千代田区平河町日本都市センターにおいて開催されます。

研究発表申込は、1969年4月30日までに下記にて、論文題目(英文)および200語程度の英文概要(スライド使用の有無を付記)を提出すること。発表は英語。なお、シンポジウム終了後、論文集を刊行する予定ですから、400語(表・図を含めて)の英文原稿2部を会期第1日(8月25日)までに提出のこと。

記

東京都文京区本郷7-3-1(郵便番号113). 東京大学工学部航空学科 近藤次郎

宇宙技術および科学の国際シンポジウム準備委員会 事務局: 日本ロケット協会 野沢誠一郎

東京都中央区銀座 3-2-1 読売新聞社内(郵便番号 104) 電話 567-1, 111 内線 794